



Title	山間行
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	各務時報, 54
Issue Date	1931-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77691
Type	column
File Information	A010_09P2-12.pdf



[Instructions for use](#)

私は数年山間の地味調査を試みたが、... 山間行の記録である。

一、勇壯感

一かどの登山家の様な服装をして、... 勇壯感の経験談。

しては少しく苦笑したくもあつた。... 登山の苦難と勇壯感。

だが「成る程こんないでたらなら歩くのも楽だ」とつくづく感心もした。... 登山の苦難と勇壯感。

りを感じる事が出来なくなつた。... 登山の苦難と勇壯感。

二、若葉まで

柳ヶ瀬から關まで電車。關から若葉までキツプを買つて自動車に乗つた。... 若葉までの登山記。

ろがあると思ふ。浮いて居ない音は... 登山の苦難と勇壯感。

浮いた音が如何に多く復合しても出来ないのではないかと思ふ。... 登山の苦難と勇壯感。

をまん／＼とたへて居た時代を想像して見た。

2

若葉に着くとそこに大きな馬車屋の爲の宿屋がある。それは可成り大きな宿屋であつた。二十頭位の馬のつなぎ場と其れ丈の數位の馬車を入れるに足る大きな土間が一棟の下に收まつて居る大きな建物がある。其れは馬車挽く人が泊まる宿屋の本屋とは別に建てられてあつた。

は今から十年ばかり前で、大正十三年頃が最も繁昌した。其頃は馬車と馬のつなぎ場の爲の建物かもう一軒立つて居たが、それが皆満員であつた位であつた。それが金山まで汽車が出来たので、物自動車盛んになつたので、すつかり駄目になつた。今では一ヶ月に二、三度位しか客がない。馬と馬車と人で一泊堂間七拾錢、それにはカイバは含まない。以前はカイバもこゝでやつて居たが此節では不景氣で馬車挽がカイバも自分で持つて来るので、こゝではやらぬ。こゝは關から四軒目の馬車宿である。下町までには二十軒もある。然し今はその内大抵轉業しかけて居るものが多し。この馬車宿と云ふのは今から三十年前まであつた昔の牛宿とは別で馬車が出来て以来のものである。おばあさんはいしきりに不平さうに時勢の變遷を呪ふ様に時々二人の對話の間に口を入られて居たが、話を主人にまかしてガラシの様な馬車置場で仕掛けて居た蘭の縁とを再びはじめた。家が大きいのでその一間にあるおばあさんがとても小さく見えた。

「涼しいからこゝは緑くるにはよいですよ。廣いもんだでよその人まで乗の葉をおいてくれとこんなに煩んで居ます。」

「無いなア。皆店屋か宿屋か床屋か料理屋か、そんなもんやなア。」

三、川合まで

若葉を出ていよいよ飛騨街道をすて、神保川をさかのぼり始めた。河原は益々よく開えた。路傍の斷崖の間に炭土が所々に現はれて居るのをきつかりに石炭の話を聞いて聞かされた。洪積期の層かこんな石炭の出るのには珍らしい事も教へてくれた。

この清流のフナは甘いだらうと話しながら通つた。小和田のあたりでは川の床に大きな地球の骨が出て居た。このあたりでは一番よくカガの聲を聞く事が出来る。歌を作らうと考へ込みながら黙つて歩いて居ると、何か話しかけたので駄目になつた。その事をNに云ふと、そりやすまなかつたと云ふ。

Nはミルクやチョコレートの様なのをとり出して、たくみに甘い飲料を作つた。二人はパンと共にそれを食つた。馬車宿だけあつて、蠅の多いのは困つた。拂へども、無数の蠅が勇敢に襲つてくる。宿の婆アさんは中食すると知つたので、氣をきかして、液物もどろろり一ぱいといでくれた。二人はほそそり一ぱい加へなかつたから、蠅は思ふ存分そこに集つて居た。

飯を終つて、Nが釣竿をとつて居る間に宿の中年の主人らしい男が外から百姓の仕事を着をつけて入つて来た。私はその男にこの宿の事を色々尋ねた。主人の話す處によると、此宿が出来たのは

「六十軒の此町は何軒位あります。」

「無いなア。皆店屋か宿屋か床屋か料理屋か、そんなもんやなア。」

「随分大きな宿屋や料理屋がありますね。お客はどんな人が来るんです。」

「川合はこれで二ツの谷の分れ目にあるのが、此奥の二ツの谷の百姓達がつまりこゝに遊びに来るんやア。買ひ物でもさうや。役場も警察も皆こゝにあるもんや。此村の首府やな。これだ。」

「汽車や自動車が出来たので幾分影響があるでせうね。」

「ある。店屋はあかんや。高山線が金山まで来たのと、越美南線が八幡まで来たので川合はあかん様になつたなア。」

「丁度その時荷馬車が店の前に止つておかみさんが何か話して居た。」

「馬車もいかに様になつたでせうね。」

「馬車もあかんや。あれ關まで行つて歸つて来た處やが、注文を集めて關に行つて一晩泊つて歸つて来ると丁度一度で三日かゝるでなア。それで先づ拾圓や。その内關で一泊して宿料も出すんやでなア。自動車と競争は出来んなア。」

「話はずがが、その先に購買組合の事務所がありますね。組合が出来たのは商店の爲には、よくないでせうね。」

「あかんや。そりやあかんや。そや／＼加入して居る者もあるしなにもあるんや。此頃大抵村毎に出来るとなア。」

「小那比まで行くんだが、此先に宿屋がありますか。」

「ある。ナカムラと云ふ處に三軒ある。その前にも一軒ある。ナカムラの朝日屋と云ふのがいゝや。」

「朝日屋はその土地の人ですか。」

「そや／＼昔からの宿屋や。」

四、火打峠まで

川合を出ると空模様は少し怪しくなつた。七八日も行つた頃からポツ／＼雨が降つて来た。

「村はまだ此先づいって居ますか。」

「Nは地圖を見て『もう一寸行くと少し村と村との間が切れて居ます。降る様ならどこかもう一寸行つて雨宿りしませうか。』

「さうですな。久しくビショぬれになつた経験がないからどうも健康の自信がないです。成る可くならさうしませうや。」

空模様を眺めながら歩いて居る内に雲はたちまち晴れて行つた。歩くにつれて溪流はだん／＼小さくなつて行く此あたりではもう川の底から到るところ大地の骨が露出して居る。對岸の切り立つた山には鬱蒼たる樹木が繁茂し處々に大きな巖がとび出して居る。

「猿でも居るさうですな。」

「居るかも知れません。」

對岸の湧き水を長い掛樋で川と道の上を横切つて家の前の水溜に水を引いて居るのが處々にある。私等は何處もその水溜の樋の出口の水を手をうけて

呑んだ。そしてこの水は甘いとか、甘くないとか批評した。村營で發電所のダムを造つて居るのがあつた。四五人の村の人が石をこんで居る。

「村營で發電所が出来て燈用と幾分の動力が出来たらそりやいゝですな。」

然しこの邊は川があるから出来るんではな。

「さうですな。然し設備の費用は水力より火力でやる方が安いです。然しその後の經營費が水力は少ないからいゝんです。」

「たつたこれしきの事業でも、村の人の苦心は大したものだつたでせうね。何かはつきりした決議の機關でもあつてそこで發言する丈ならそれ程大した苦心もないでせうが、恐らくこんな小さな村では實際上一人々々を説いて行かなければ駄目です。愈々着手するまでの苦心は大したものだ。」

投票で決議が行はれる場合に比すれば情實や誠意が主となつて居る場合は一寸やよい様にも見えるがほんとうにはとても困難でせう。都會では先覺者と思はれるものが、それを賣りものにして居るんですが、田舎の小さな村で先覺者は其爲に苦しみぬくんでせう。」

道は依然として川についで上りその傍に長くも一里たらずの間隔を置いて小さな部落が連続して居る。大分もう歩いたのであらう。脚が少し痛みを感

じはじめた。心臓の鼓動が不正調になつた。黙々として歩く。

「大丈夫ですか。」

「Nがしばらく沈黙の後に云つた。『大丈夫です。然し心臓が一寸變なんです。足も少し痛みますが、まだ大丈夫歩けます。問題の峠はまだですかね。』」

「もうすぐです。多分あの山の間の谷でせう。何ならこの邊で泊めてもらへない事もないでせうが。」

「いや大丈夫です。只歩調を少しゆるめて下さい。」

私はNの歩調の早い事を人から聞いて居たが今始めてさうだと感じた。そしてやゝもすれば遅れがちになつた。さつき川合で小那比までの道程をたづねた時、『えらい峠が一ツあるでなア』と云はれた時から早く行つて見たくもあるし、又どの程度の難路か不安でもあつた。

「峠は高度どの位ですか。」

「大した事はありません。さうですな。エ、Nは地圖を見入つて居たが百三十米位だから大した事はありません。」

と云つた。然し百三十米の高度がどの位の困難さなのか全然分らない私にはたゞ漠然と大した事はなないんらうと自分であきらめるより外なかつた。然し百三十米と云へば金華山の半分足らずである。金華山に登る事を一日の大事業とした私には既に數里の道を歩

いた来た今からその半分でもとても大きな仕事だと思つた。此峠を越す事が今日の行程の最高調點である。然し峠の文化的の意味について一寸机上で考へた事のある私は今はじめて意見もつて現實の峠を見る事の出来る事をよろこびました。峠の登り口に一軒の民家があつてその家の横から近道が群衆が居る。そしてその近道の下に清水が湧いて其家の物洗場になつて居る。

「一寸息ひませう。」

Nはリュックサックを草の上におろして湧き水を呑みに降りて行つた。

「いゝ水です。あげませうか。」

私はリュックサックを投げ捨てる様にふるして草の上に腰を下して居た。

「さうですな。下さい。」

Nはアルミニウムのコップに一杯くんで下からさし出してくれた。とてももうまい水であつた。

Nはその民家の娘に峠道の事や宿屋までの里程などを細く、たづねて居た。その話によると近道はそれ程困難でなく餘程近いとの事である。

「近道行きませう。Nは上つて来てさう云つた。

「今度は一ツうんとピッチをゆるめて下さい。私が先になります。」

私は皆で金華山に登つた時一緒に登つたアルビニストHに登山のテクニクを説明してもらいながら思ひ切つておそい歩調で登つて案外に疲れなかつ

た経験にしたがつてこゝでもとてもおそいピッチでお歩きはじめた。

「こんな山を歩くにはあなたは何回も疲れるでせうね。」

「さうでもありません。あなたは身體の動きをもつと利用したがいよいよあなたの上半身は少しも動いて居ないです。よ、こんな風に上半身を揺りながら行くんですよ。Nは五六歩歩いて見せた。『身體の動くにつれて足は自然に出てくるんですよ。』とつけ加へた。私は云はれた様にして歩いて見た。然しまだ體得しないと見えて上半身をゆるのが如何にもわざとらしくて反つて歩みにくい様だと思つた。二人はいつの間にか黙つてしまつた。坂道がやゝこたへて来たのである。

「もうそこです。峠はNが云つた。『なんだもう来たのですか。』」

「近道来てよかつたでせうね。新道だとも長いんですよ。あれがなんなま。新道はいくつものMの字をあつめた様にまがつて居た。

峠の上に二人の男が地ならしをして居た。茶屋でも作る爲である。地ならした土の上に直径一尺もある丸石が五ツ六ツころがらつて居た。又掘り折いた断面に砂利の層が露はれて居た。

「以前川がこゝを通過して居たんですよ。つまり川床があんなに下の方まで下つて行つたんです。今はあの山の向ふの川が流れて居ますが、以前は此火打峠の

谷を流れて居たんですよ。」

成る程と聞きながら私は色々に想像して居た峠の景觀をあかす眺め入つた。私は今經て来た火打部落の繁盛状態を極めて注意深くながめた。

Nは地ならしして居た二人と話し初めた。何でも今の火打峠の道路は最近のもので前は人家がたかちかちか居る所が通路たつたんださうである。車を通ずる道を作る爲に改修したのである。

「何か土の内から土器か石で作つた矢の根見た様なものでも出て来なかつたですか。私がたづねると二人の内の一人が答へた。

「出やせん。金の窟でも出ればいゝがなア。」

Nが火打をうつして居る間に私は井戸ノ上の部落の見取圖を書いた。

いそいでそれ等の仕事をすまして歩きはじめるとこの峠から道が一寸まがつて一町も行くとき昔からの峠茶屋らしい家がある。今は茶店にして居ないらしい。そして見た處今も人は住んで居るが誰も人影は見えなかつた。家のまわりに水田がつつてあつた。壘一疊敷ばかりの水田もあつた。

「まるで水田の模様ですな。」とNが云つた。

五、小那比の中村

そこから道は愈々下り坂。下の部落と峠の中間の道はたに五つばかりの墓碑がならんで居た。此の邊では一軒づつ自分の家の墓を自家の近所の山の中間に建てた風がある。井戸ノ上の部落には一寸した雜貨屋もあつた。神社らしい森もあつた。その森の外側の川の岸で子供が火をたいて居た。夕闇の中に森と静かな川と火の動く色と何となく原初時代の人間の生活をしのばせた魚でもとつて居るのであらう。

井戸ノ上から道は又少しづつ上流にのぼつて行く。火打峠は分水嶺ではなく水系の途中にあるのである。流路は險しい絶壁の間にあるので人道は仕方なくあの峠を撰んだのであらう然し峠を越すと氣持が何んとなく別の流域に來た心地がするものである。今道が再び登りはじめたので成る程あの峠は分水嶺ではなかつたと初めて合點す

た経験にしたがつてこゝでもとてもおそいピッチでお歩きはじめた。

「こんな山を歩くにはあなたは何回も疲れるでせうね。」

「さうでもありません。あなたは身體の動きをもつと利用したがいよいよあなたの上半身は少しも動いて居ないです。よ、こんな風に上半身を揺りながら行くんですよ。Nは五六歩歩いて見せた。『身體の動くにつれて足は自然に出てくるんですよ。』とつけ加へた。私は云はれた様にして歩いて見た。然しまだ體得しないと見えて上半身をゆるのが如何にもわざとらしくて反つて歩みにくい様だと思つた。二人はいつの間にか黙つてしまつた。坂道がやゝこたへて来たのである。

「もうそこです。峠はNが云つた。『なんだもう来たのですか。』」

「近道来てよかつたでせうね。新道だとも長いんですよ。あれがなんなま。新道はいくつものMの字をあつめた様にまがつて居た。

峠の上に二人の男が地ならしをして居た。茶屋でも作る爲である。地ならした土の上に直径一尺もある丸石が五ツ六ツころがらつて居た。又掘り折いた断面に砂利の層が露はれて居た。

「以前川がこゝを通過して居たんですよ。つまり川床があんなに下の方まで下つて行つたんです。今はあの山の向ふの川が流れて居ますが、以前は此火打峠の

谷を流れて居たんですよ。」

成る程と聞きながら私は色々に想像して居た峠の景觀をあかす眺め入つた。私は今經て来た火打部落の繁盛状態を極めて注意深くながめた。

Nは地ならしして居た二人と話し初めた。何でも今の火打峠の道路は最近のもので前は人家がたかちかちか居る所が通路たつたんださうである。車を通ずる道を作る爲に改修したのである。

「何か土の内から土器か石で作つた矢の根見た様なものでも出て来なかつたですか。私がたづねると二人の内の一人が答へた。

「出やせん。金の窟でも出ればいゝがなア。」

Nが火打をうつして居る間に私は井戸ノ上の部落の見取圖を書いた。

いそいでそれ等の仕事をすまして歩きはじめるとこの峠から道が一寸まがつて一町も行くとき昔からの峠茶屋らしい家がある。今は茶店にして居ないらしい。そして見た處今も人は住んで居るが誰も人影は見えなかつた。家のまわりに水田がつつてあつた。壘一疊敷ばかりの水田もあつた。

「まるで水田の模様ですな。」とNが云つた。

る事が出来た。

非戸上から二ツ三ツの聚落を経て川の上の中村に來た。一日の行程は終り泊る可き宿はもう手近かにあると思ふ時のうれしさは格別である。途中二三軒の人にたづねてやつと朝日屋と云ふを見つけた。朝日屋は川合ではじめて紹介されたのであるが、その後私等は幾人か朝日屋がよいとおしへられた。その評判のよい朝日屋がどんな家であるか、私等には可成りの興味であつた。中村に來た時二階家の四つ棟瓦ぶきの新築があつたから「あれだらう」とNが云つた。私はひそかにそれがさうでない事を希つた。私はこの山村の一は夜は出来るなら一般の民家で泊りたかつた。それが出来なれば民家と同じ様に建てられて同じ様な生活が營まれて居る様な宿屋に泊りたかつた西洋建築まがひの四つ棟の家にとどまる事は私の興味が半減するのである。その四つ棟は幸にして朝日屋ではなかつた。それは購買組合の事務所であつた。そして朝日屋はクレッキの飛騨式の二階家で古ぼけた家であつた。然し私等は新築された妻のトタンぶきの離れ座敷に通された。

私は今まで身につけて居たものをダニも拂ひおとす様に脱ぎすて、眞はだかになつてほつとした。Nは私親戚れて居ない爲でもあらうが脱ぎながら一つ一つ整理して行くのを見て感

心した。感心したのが眞似る餘りもなかつた。裏の窓の下は斜面に降つた畑でその下には川が流れて居た。カジカの聲も今ではめづらしくもない。夕闇の中に水車が見える。

Nが湯に行つた後でおかみさんが宿帳を持つて來た。二人の名前などを記入したあとどんな人が此宿に泊つたかを初めのページから順々に讀んで見た。薬屋と菓子屋が一番多かった。稀にある菜園屬菜などと記入したものはその書き振りを見てもそんな官吏が如何に此邊に來ては權勢振るものであるか、わかかる。他の客達が族稱「平民」姓名「何某」年齢「何歳」前夜宿泊地「何處」一行先「何處」と町名にへたな字で書き込んで居るのに對して某縣屬何某と大きく二行にも亘つて亂暴に書きなぐつてあるやうな年輪も族籍も行く先も何も書いてない。大したものである。

Nと入れ交つてお湯に行つた。風呂場は本屋の上開の一隅にかこめてつづつてあつた。此朝日屋は本屋では雜貨を賣りその二階に茶屋階級の人の客間が三つばかりある。無屬や我々の様な洋服を着た者の爲に妻の離れが提供されるのらしい。本屋では店がはつてある外酒や焼酎なども飲まして居る。私は風呂の中から三四人の客が酒を飲みながら世間話をして居るのを見た。随分卑猥な事を四十面した男達が慥面もなく云つて居た。何でも村の

人ではなく今泊りあはして居る客達らしかつた。風呂からあがつてその人達の前を通つて離れに行く時一寸その人達の顔を見上げると五つ六つの目が酒にうるんで氣まじ悪るさうに私を見て居た。

離れに行く座敷は綺麗に整頓されて居た。Nにすゝめられて足の痛むところにサロチールをぬり込んだ。疲れた筋肉の中に涼しくしみ込んで行くのは足をなげだして横になり静かに目をふつて軽い疲れの快感を意識的に味はふとした。心地よい空腹の感じもすてがたいものである。充血した脚にしみこんでくるサロチールの刺戟もよい。ぼんやりと考へる力を持ち得ない疲れ空洞になつた頭もよい。カジカの聲、水車の音、店で話して居る酒呑み客の談笑の聲。現實としてはあまりにリズムカルで和らから海いヴェールの向ふからでも聞えて來る様である宿のおかみさんがお膳をもつて來た「ビールでも呑みませうか」

「さうですね。新らしいかしら。古いのはあたりますからね。然し見れば分るでせう。」

一本のビールは小さいコップに三杯づゝあつた。腹の中に込み込んで行くのが分る様であつた。酒に弱いNは三杯のビールでよい色になつた。

食事はそれ程まづいものではなかつた。何を食つても甘かつた事だけは事

實である。カニの罐詰に酢をかけたものがあつたが、二人は危険を恐れてついに箸をつかなかつた。

食後二人寝をべりながら漫談をした話しはもう廻つて行つたものか、「長くない一生に出て來れば美しいものよ、いもいもを見て出來たいものよ、人や社會や自然の善い方面を見て行けたらほんとに幸福と思ひます。出來る丈まづ努めるんでせうね。さうすれば、可成りの損を見た方が得の様にすつまり時にはだまされ、うらをかゝれる時もあるかも知れぬが、やつぱり人は皆正しい美しい者と認め信じて行つた方が得の様です。たつた五十年前私はそれで行くつもりですよ。」

Nは私が意を得た様にだまつて聞いて居た。明日の行程なども相談して「もう寝ませうか」と云つた頃にはさすが山里らしく夏と思へぬ冷気がたゞよつて居た。カジカの鳴く川の方を見やると文字通りの眞の闇で一點の微光も見えぬ。

「今日の都會にはあんな暗黒は無いでせうね」

「今の都會の小供はあんな闇は知りません。」

随分夜が更けた様である。ではまだ酒を呑んで居る三人である。時計を

「床のべて下さい」と聲をかけたら宿のおかみさんが來た。

「蚊帳釣りませうか」

「さうだね。S君釣つてもらひませうか。やつぱり少しは居るやうだから」

二人が今休んで居る岐阜の郊外の有名な蚊の多い町に比べると、こゝは全然居ないと云つたが適當な位である。それでもやつぱりつゝでもらふ事にした蚊帳の内を忘備録に二三行書き込むとすくうとして來た。

第二日

六、氏神宮、お札、戸主會など

目を醒ますとNはもう起きて居た。「もう何時です」

「もう九時近くです」

「よく寝ましたね。昨夜はぐつすりでした。あなたよほど前に起きたのですか」

「いゝえ。さう三四十分前でした。今村の中を歩いて來ました」

大便する所は家の外であつた。この邊では皆こんならしい。顔洗つて居ると縣の技手らしい男がどこか調査にでも出て行くところだつた。昨夜隣家に居た客であらう。

朝飯をすまして旅装をしながら宿のおかみさんに色々村の話の聞かしてもらつた。私が村落調査の参考にもと思つて少し並ち入つて質問しはじめたら自分では分らぬからと云つて主人を連れて來た。私は約三分もつゞきさまに色々事を質問し一ち一ちノート

に記入した。私は私自身の爲丈にこれ以上時間を用ひる事は、に氣の毒な氣の上で質問の事も切つた。私はこの經驗で村の人がどんな質問に答へ得ないか、又どんな質問がしにくいものであるか等いくらか知る事が出來た。そして極めて短時間にでも可成り多くの事が聞けるものである事も知つた。そこで其爲には調査項目を整理して置く事が大切だと云ふ事をつゞく感じ

宿泊料は二人で試問それにビール一本五拾錢合計試問五拾錢。登園の茶代をつけてやつた。

私はさつき便所に行つた時宿の前の畑の中に石陣が立つて居るのを見た。主人に聞くにそれは以前氏神であつた所。當時はそのまわりは藁であつた。氏神を今の所に移した時、此以前からの鎮守の森の跡に碑を立てたのである。今では畑の中にポツンと立つて居る。私等は宿を出てすぐ此氏神の碑を見に行つた。「氏神宮」と題してあつた。宿の主人は「よほど古いもの、様に云つて居たが寛政元四年九月十七日と刻んである。畑の向ふの山の根には三ヶ所ばかり墓石の三四個づゝならんで居るのが見えた。此村は宿の主人は上程古いんだと云つて居たが、一軒の家で五つ以上も墓石のある家はないとも云つて居た。この邊は墓の制は水澤上など、もう少し異つて居るが町方とも異つて居

此山地方を調査する場合には墓制のある程度まで確めて置く事が必要であるらしい。

此部落には宿屋が三軒その内二軒はタバコ屋雜貨屋をかねて居る。床屋があつたさうであるが立ち行かぬのでやめたらしい。交番と組合事務所が日につく。

學校に行く。生徒二百三十人先生六人と云ふから相當の構へである。校長が出張中で代理の先生に會つた。他日此部落を組織的に調査する時に便宜を與へて貰へる様に敬意を表した譯である。村誌や地圖を見せせて貰ひ、又村の郷土史家も紹介してやるのと事であつた

學校を出ると今から太陽の暑さを感じられるじつとした。學校を出て一町も行かぬ川沿ひの丘に三軒のクレッキの民家が並んで居る。典型的な此邊の民家と思つたからNに寫眞をとつてもらふ。家の内からめづらしさうに寫眞とをの眺めて居た。然し此邊はクレッキばかりではないのでワラシキ瓦ノキも相當にある。山村としては特に瓦が多い。私等は小那比になる途中瓦を焼いて居る處を見て成る程だと思つた。瓦をこれ程多く用ひる處を見ると寒さも大した事でないのだらうと想像出來る。

そこから更に二三行つた時ある民家の入口に、お守り札を三四枚料や組合の色々の役名を書いた札や門札など

一緒に比較的整つてはつてあるのが目についたので、そこを寫眞にとりたと思つてその家の横側から家の人に聲をかけた。

「あの失禮ですが、参考にしたいからお宅の入口のお札をばつてある處寫眞にとりたいのですが」

「誰のそばにねをべつて煙草をのんで居た主人らしい男が私がさう云ふと、「へー」と云ひながら首をたれて考へ込んで居た。私は困つたと思ひながらも、「何もむづかしい事ぢやないんです。只参考までにどんなお札がはつてあるか見る爲に寫すんですが」と云つた。

「へー」

主人は頭をあげて居たが再び垂れて考へ込んだ。

「いやさう御不快に思はれる程の事ではないのですが、」

主人は起き上つて坐つて、煙管に煙草を入れながら判斷に苦しんで居る様であつた。私は氣の毒に思つたから「では失禮しなさい」と云つた。

主人も其時氣の毒さうに「へー。さうかな。と確か云つた様であつた。道に立つて居たNの側に行くと、「どうでした。いけないつて。」

「いけないとも云はないんですけど、とても考へこんでうんともすんとも云はないんですよ。然しそれは恐らくさうでせう。一家の入口に昔から放も大切に處と思はれて居るし、それに自分達

の信仰するおれでせう。それを参考の材料に供されては一種の冒瀆とでも感ずるのでせう。

「だます譯ではないが、お札と云はな...」

それから他に適當の民家はな... 見て行つたが...

七、最奥の聚落三ツ谷

集会所のある聚落を通りぬけるとし... ばらく人家がない。

集まつて居る所に來た。一寸珍らしく... 大きな家が...

「一寸ペンントウ食ふんですか、茶一ぱい...」

「三ツ谷を私少しよく見たんです。...」

のぞく爲に云は... 一種の自己催眠自己...

「人家はまだ此奥にもあるですね。」

「四百八十米。大した事はないでせう。...」

ンとタカチアスターを五粒ばかりづ... 呑んで気安めにした。

「食事を終へてからおかみさんとら...」

「此村の九軒の名前は同じが多いで...」

「ヘーエ、坂本と云ふ姓です。」

「結婚はどうして居ます。此九軒の間...」

「ヘーエ、大抵外へでな。」

「野々倉やな。ヘーエ、八幡にもあ...」

「買物などにはどこに行きます。」

「八幡ですな。ヘーエ、川合には行...」

「九軒の家は職業はなにをして居ます...」

「お置と百姓ですか。」

「さう云つて おかみさんは恥かしさう...」

「田畑はあるんですか。」

「少しありますな。」

「さう云つて 更に恥かしさうな顔をし...」

「此少し下の方の田ですか。」

「さうですがな。此上にも少しあり...」

此山奥で林業がないと云ふ事が不... 議であつた。

「ハヤコ峠は高さどの位ですか。」

「あれはカヤの木でせう。」

「モミでせう。カヤはもつと杉の様な...」

「あんな木は如何にも深山の趣きがあ...」

「今日の位登つたでせう。」

「さう。百米一寸ですね。峠まで今...」

て登つて行くのに出會つた。

森重君が先鋒を承はる事になつた。

奥から老婦が出て來て

し、私共もつい一週間は前こ

ですね。あれはつまり川底がすべて行つた後です。まうと長良川は以前にはその山の向ふを通つてあの斜面の處を通つて、こう流れ来たに相違ありません。」と云つた。

長良川の對岸には嘗つて考古學の同好の學生達と見學に來た清川の谷の入口が見える。そして其谷の入口に小學校がある。その小學校の敷地からは珍しい石器が澤山發見された。其時聞いた。こゝから見ると其小學校は川の面からいくとも高くない用岸にある。「あの小學校の右手に杉の木が見えるでせう。あの邊から深山石器が出たんです。と云ふ事は石器時代には既にあのテラスは川からやはり相當の高さにあつた筈なんです。が、その頃から今自までその浸蝕は殆ど分らないくらいなんです。さうすれば長良川がそのテラスの上に流れて居た頃は石器時代より何百何千倍も古い時代でせうね。」

「さうですね。川の浸蝕は百年や千年では殆ど目立たぬ位でせう。つまり新石器時代などでも人間の歴史的には古い様ですが、川の歴史から云へば問題でない位です。」

「では石器時代と今日と地形は殆ど同じと見ていいですね。」

「こんな山地では先づさうですね。然し海洋では五寸の高低で海岸線はともちがひますから、海岸線は可成り

ちがつて居るでせう。」

期安の驛に出ると丁度よい汽車があつた。美濃町で汽車に乗つてそれから電車に乗る様にキップを買つた。汽車に乗ると三四日ばかりで板取の谷から高賀山に登つた學生達四五名と一緒になつた。

私等は長良川の本流に出て其左右に如何に廣大な平地があるかを今更の様に驚いて見た。美濃町から電車に乗つてからは特にさうである。谷間の掌大の土地を大事がつて居る様子を、つぶさに見て來た私等は見渡すかぎりの平地を見て何となくもつたない様な氣がした。「此邊の人は果して平地の尊さを充分知つて居るのだろうか」といらいぬ心配さへした。

十、都會

柳ヶ瀬につくと丁度ラッシュアワーであつた。私は途中から上衣をぬいでワイシャツ一枚にリュックサックを背におつて居たが、ひよこり柳ヶ瀬の雑踏の中に電車から降りると恐ろしい威嚇を感じた。柳ヶ瀬の入口にある六階建ての建物は家と云ふ感じはしなかつた。私は其時ほんとに田舎から出て來た百姓が此建物の前で電車から降された時どんなにおどおどするだらうか想像にかたくなかつた。

私は又其時都會はうなつて居ると感じた。又氣狂いの様にきよとついて居る様にも感じた。